

平成 28 年度水産研究成果情報

課題名: アゲマキ種苗放流による母貝集団創出と近年のアゲマキ発生状況の推移

[背景・ねらい]

アゲマキは、漁業生産の上でも極めて重要な二枚貝であったが、1990 年頃にかけて激減し、1992 年以降は 20 年以上ほとんど漁獲がない状態が続いている。このため、種苗生産・放流技術を開発し、アゲマキ母貝集団を創出し、資源の再生産力回復を図っている。

これまでの、種苗放流による母貝集団の創出効果を把握するため、2006 年から地先の稚貝発生状況を調査してきており、近年、大幅に発見個数が増加していることから、母貝集団創出の過程を含め、その状況を報告する。

[成果]

- (1) 2009 年度以降の 8 ヶ年で、放流用の稚貝(殻長約 8mm) 約 996 万個を生産し、これらを佐賀県沿岸の 15 地区に放流した(図 1)。このうち、太良町地先に放流したアゲマキは比較的良好に生残し、放流 2 年後には漁獲サイズ(70mm)を超え、順調に成長していることを確認した。また、鹿島市浜地先、七浦地先、佐賀市などの各地先に放流した種苗についても、十分に母貝となる程度の密度で生残している。

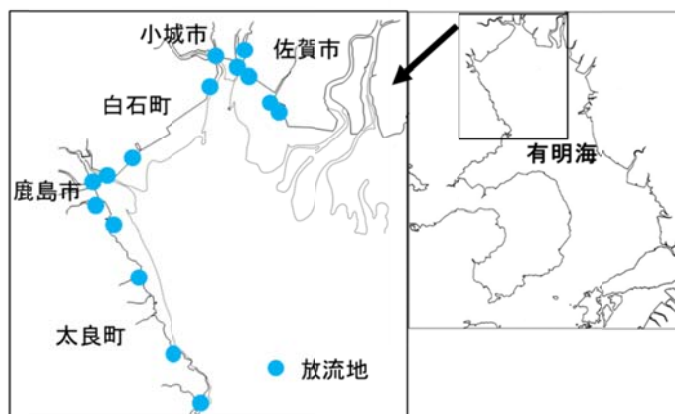


図 1 これまでの種苗放流地

- (2) これまでに、1 年以上生残した放流群は、9 月から 11 月にかけて肥満度が低下し、生殖腺組織切片の状況からも産卵したことが推測された。また、沖合域で浮遊幼生が検出されていることから、十分に母貝集団として機能しているものと推定される。
- (3) 2006 年以降のアゲマキ発生状況を図 2 に示す。2008 年以降、主に浜及び七浦地先で確認され、2010 年以降は六角川以東でも確認されるようになった。特に、浜・七浦周辺では、2015 及び 2016 年に 1 地点当たり 100 個体以上確認されるような点が見られ、最も多いところでは、100m² 踏査する中で 500 個以上発見された調査点もあることから、一部の地域では資源の回復が見られている。
- (4) これまでのアゲマキ放流個数とアゲマキの発見個数との関係について、図 3 に示す。2010 年頃から年間 100 万個規模の放流となり、母貝集団が少しずつ形成され、再生産機能の回復が起こった結果、鹿島市地先で 2015 年から天然発生個体の大量発生が起きたと推定された。

[課題・問題点]

- ・再生産過程の把握による、より効果的な母貝集団の創出

[今後の対応]

- ・浮遊幼生の動態を考慮したうえでの稚貝放流および成長個体の移植

[その他]

研究期間：平成21年～

研究担当者：資源研究担当 佃 政則

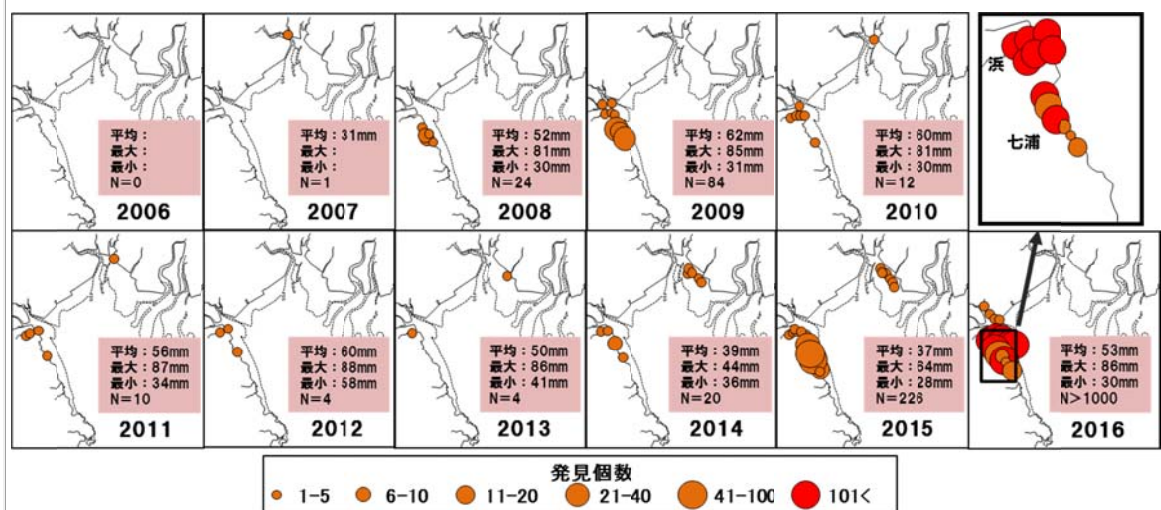


図2 2006年～2016年までのアゲマキ発見状況の推移

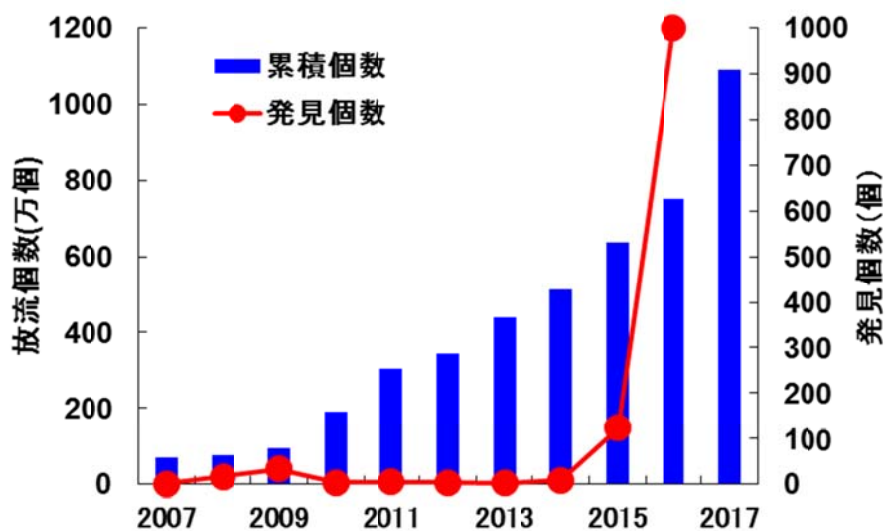


図3 アゲマキ種苗累積放流個数及びアゲマキ発見個数の推移